



令和4年度

2022

独立行政法人 国立文化財機構 概要



目次



国立文化財機構：
発足から10年の節目となった平成29年度に、ロゴマークを作成しました。
コンセプト：「結び」
形は結びヒモとDNAのらせんの形をかけたデザインです。
「結びヒモ」は「人と文化のつながり（文化財）」を、「DNA」は「昔と今と未来のつながり（伝承）」をイメージしています。
文化の遺伝子を深く理解し、世界中の人々へ魅力的に伝承する国立文化財機構の姿勢（こころ）を表現しています。

(表紙写真)



東京国立博物館
本館（日本ギャラリー）



京都国立博物館
明治古都館



奈良国立博物館
なら仏像館



九州国立博物館



東京文化財研究所



奈良文化財研究所
本庁舎



アジア太平洋無形文化遺産
研究センター

ごあいさつ	1
I 国立文化財機構のあらまし	2
II 国立文化財機構の事業	6
1 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	6
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承	
■ 収集	
■ 保存・修理	
(2) 展覧事業	
■ 展示・公開	
■ 博物館来館者数	
(3) 教育・普及活動	
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究	
(5) 国内外の博物館活動への寄与	
(6) 文化財の積極的な活用による文化財の継承につながる新たな取組	
2 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施	8
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究	
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基礎的な研究	
(3) 文化遺産保護に関する国際協働	
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用	
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等	
(6) 文化財防災に関する取組	
III 各施設の活動	10
東京国立博物館	10
京都国立博物館	12
奈良国立博物館	14
九州国立博物館	16
東京文化財研究所	18
奈良文化財研究所	20
アジア太平洋無形文化遺産研究センター	22
文化財活用センター	24
文化財防災センター	25
IV 資料	26
役員	
運営委員会	
外部評価委員会	
職員数	
組織図	
予算	
外部資金受入	
国立文化財機構からのお知らせ	28
寄附・寄贈	
会員制度	
国立文化財機構の新たな取組	

ごあいさつ

島谷 弘幸

独立行政法人国立文化財機構理事長
(九州国立博物館長)



独立行政法人国立文化財機構は、4つの国立博物館（東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）と、2つの研究所（東京文化財研究所、奈良文化財研究所）、アジア太平洋無形文化遺産研究センターの7つの施設を運営しており、各施設はそれぞれの特色を活かした事業を展開しています。加えて、本部に設置された文化財活用センター及び文化財防災センターでは、各施設と横断的に連携・協力しながら、文化財に親しむため活用機会を提供する事業や多様な文化財を頻発する災害からまもる事業を実施しています。

令和4年度は第5期中期計画の2年目として、各国立博物館ではこれまで蓄積した経験・実績を強みに、引き続き体系的・通史的にバランスの取れた収蔵品の収集と保存管理、研究成果を踏まえた魅力ある展示や教育普及事業等を継続してまいります。各研究所・センターにおいては、文化財の基礎的・体系的調査研究の実施を通じ、新たな知見の開拓につながる基礎的・探究的な調査研究等を推進してまいります。

当機構では、脆弱な文化財を適切に保存しつつ、最新の技術を活用した多様な手法により我が国の歴史、伝統、文化に触れ、学び楽しむことができる環境を提供していくことや、文化資源の積極的な活用を図り、国内外の方々にその魅力をわかりやすく紹介することで、我が国の文化観光に資することを今期の課題として取り組んでまいります。新型コロナウイルス感染症の影響により各事業において依然として様々な制約が続いておりますが、その中で、「新しい生活様式」に対応した機構の事業の在り方を模索し、確立していかなければなりません。

大変厳しい財政の中、自己収入の増加、施設・設備の老朽化対策や人材の確保・育成など、機構を取り巻く環境は決して平坦ではなく、多くの課題を抱えた中での活動ですが、文化財を守り伝え、多くの人々に鑑賞していただき、知っていただくということが現代の日本文化を生きることと深く関わり、重要な意味を持っていることを十分理解して頂けるよう発信していかなければならないことであり、それは私共の責任であると考えます。

私共の果たすべき役割を充分認識し、皆様のお力添えをいただきながら一步一步着実に前進できるよう取り組んでまいりたいと考えております。

何卒よろしく御支援を賜りますようお願い申し上げます。

国立文化財機構のあらまし

独立行政法人国立文化財機構は、ともに文化財の保存及び活用という同一の目的を有する独立行政法人国立博物館（東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）と、独立行政法人文化財研究所（東京文化財研究所、奈良文化財研究所）の二つの法人の統合により、平成19年（2007）4月に発足しました。平成23年（2011）10月に開所したアジア太平洋無形文化遺産研究センターを加え、現在では7つの施設を設置しています。また、法人本部に文化財活用センターと文化財防災センターの2つのセンターを設置し、各施設と緊密に連携・協力しながらそれぞれの事業を行っています。

統一的なマネジメントの下で、貴重な国民的財産である文化財の保存・活用を一層効果的かつ効率的に推進するため、7つの施設はそれぞれ次のような役割を果たしています。

東京国立博物館

我が国の人文系の総合的な博物館として、日本を中心として広くアジア諸地域にわたる文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

京都国立博物館

京都に都が置かれた平安時代から江戸時代の京都文化を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

奈良国立博物館

仏教美術及び奈良を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

九州国立博物館

我が国とアジア諸地域との文化交流を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

東京文化財研究所

我が国の文化財の研究を、基礎的なものから先端的・実践的なものまで多様な手法により行い、成果を積極的に公表・活用するとともに、世界の文化遺産保護に関する研究交流等を実施する国際協力の拠点としての役割を担っています。

奈良文化財研究所

文化財の保存と活用を図るために、平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡、南都諸大寺を始めとした古社寺をフィールドとして、考古、歴史、建築、庭園及び保存の各分野が連携して総合的に調査研究に取り組むとともに、国内外の文化財の保存と活用に対する協力と助言を行っています。

アジア太平洋無形文化遺産研究センター

アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための調査活動を促進するとともに、無形文化遺産保護の国際的動向に関する情報の収集と発信を行っています。

TNM 東京国立博物館



〒110-8712
東京都台東区上野公園13-9
TEL：03-3822-1111（代表）
<https://www.tnm.jp/>

周辺地図



●鉄道

JR上野駅公園口、又は鶯谷駅南口から徒歩10分
東京メトロ上野駅、根津駅、京成電鉄京成上野駅下車徒歩15分

利用案内

開館時間／9：30～17：00

※入館は閉館の30分前まで

休館日／月曜日（祝日・休日に当たる場合は開館し、翌平日休館）

年末年始（令和4年12月26日～令和5年1月1日）

令和5年2月7日

ただし、令和4年5月2日、8月15日、令和5年1月

3日、3月27日は開館

※開館時間・休館日は変更になることがあります

観覧料／一般1,000円 大学生500円

※特別展は別料金

※障がい者とその介護者各1名は無料

※満70歳以上、高校生以下及び満18歳未満は総合文化展無料

※国際博物館の日（5月18日。ただし月曜日に当たる場合は翌日）、敬老の日、文化の日は総合文化展無料

※創立150年記念として、令和4年7月20日～7月24日は総合文化展無料



京都国立博物館



〒605-0931
 京都府京都市東山区茶屋町527
 TEL：075-541-1151（代表）
<https://www.kyohaku.go.jp/>

利用案内

開館時間／9：30～17：00

特別展期間中などは開館時間が変更されることがあります。

※入館は閉館の30分前まで

休館日／月曜日（祝日・休日に当たる場合は開館し、翌平日休館、ただし令和5年1月2日開館）、年末年始（令和4年12月26日～令和5年1月1日）

※特別展及び準備・撤収期間は名品ギャラリーを閉室します。

※その他、臨時に休館することがあります。

観覧料／一般700円 大学生350円

※特別展、名品ギャラリー部分閉室及び庭園のみ開館期間等は別料金

※障がい者とその介護者1名は無料

※満70歳以上、高校生以下及び満18歳未満は名品ギャラリー無料

※開館時間・休館日は変更になることがあります

周辺地図



●バス

JR京都駅又は近鉄京都駅から駅前市バスD2のりばから乗車、博物館三十三間堂下車すぐ

●鉄道

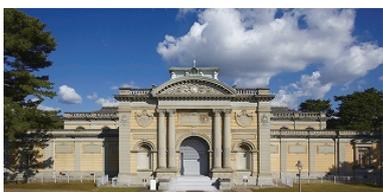
近鉄：近鉄丹波橋駅下車、京阪電車丹波橋駅から七条駅下車、東へ徒歩7分

京阪：七条駅下車、東へ徒歩7分

阪急：京都河原町駅下車、京阪電車祇園四条駅から大阪方面行きにて七条駅下車、東へ徒歩7分



奈良国立博物館



〒630-8213
 奈良県奈良市登大路町50
 TEL：0742-22-7771（代表）
<https://www.narahaku.go.jp/>

利用案内

開館時間／9：30～17：00

※毎週土曜日（年末年始を除く）、名品展、特別陳列は20：00まで

※その他、周辺行事にあわせ開館時間を延長します。

※特別展（共催展を含む）は展覧会ごとに定めます。

※入館は閉館の30分前まで

休館日／月曜日（祝日・休日に当たる場合は開館し、翌平日休館）、年末年始（令和4年12月28日～令和5年1月1日）

※その他、臨時に休館することがあります。

※開館時間・休館日は変更になることがあります

周辺地図



●鉄道

近鉄奈良駅下車 登大路を東へ徒歩15分

●バス

JR奈良駅又は近鉄奈良駅から市内循環バス（外回り）「氷室神社・国立博物館」下車すぐ

観覧料／一般700円 大学生350円

※特別展は別料金

※障がい者とその介護者1名は無料

※満70歳以上、高校生以下及び満18歳未満は名品展無料

※国際博物館の日（5月18日。ただし月曜日に当たる場合は翌日）、関西文化の日、おん祭お渡り式の日及び節分の日、名品展無料



九州国立博物館



〒818-0118
 福岡県太宰府市石坂4-7-2
 TEL: 092-918-2807 (代表)
 www.kyuhaku.jp

利用案内

開館時間 / 9:30~17:00

※夜間開館時の金・土曜日は20:00まで

※入館は閉館の30分前まで

休館日 / 月曜日(祝日・休日に当たる場合は開館し、翌平日休館)、
年末(令和4年12月24日~31日)

観覧料 / 一般700円 大学生350円

※特別展は別料金

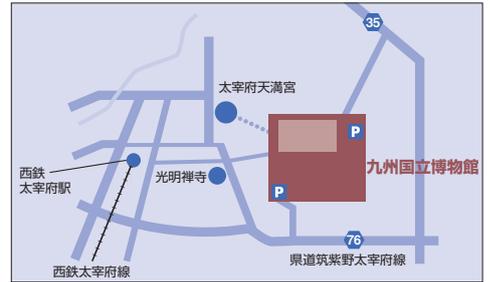
※障がい者とその介護者1名は無料

※満70歳以上、高校生以下及び18歳未満は文化交流展(平常展)無料

※国際博物館の日(5月18日。ただし月曜日に当たる場合は翌平日)及び敬老の日は、文化交流展(平常展)無料

※開館時間・休館日は変更になることがあります

周辺地図



●鉄道

西鉄電車: 西鉄福岡(天神)駅から西鉄天神大牟田線(特急約16分/急行約18分)で西鉄二日市駅乗り換え、西鉄太宰府線(約5分)で西鉄太宰府駅下車、徒歩約10分。

※特急/急行料金不要

JR: JR博多駅からJR鹿児島本線(快速約15分)でJR二日市駅下車、JR二日市駅から西鉄二日市駅(徒歩約12分、バス約6分)、西鉄二日市駅から西鉄太宰府線で西鉄太宰府駅下車、徒歩約10分。

●自動車

九州自動車道: 太宰府IC又は筑紫野ICから高雄交差点経由で約20分。

福岡都市高速: 水城出口から高雄交差点経由で約20分。

●タクシー

JR二日市駅から約15分・福岡空港から約30分。

●西鉄バス

博多バスターミナル(1階11番のりば太宰府行き)から西鉄太宰府駅下車(所要時間約40分)、徒歩約10分。

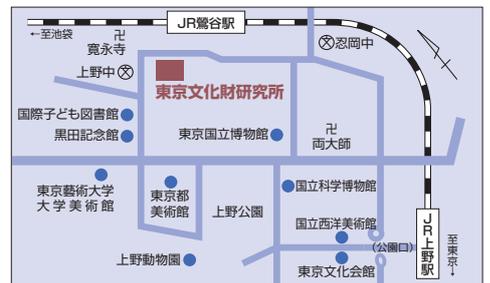


東京文化財研究所



〒110-8713
 東京都台東区上野公園13-43
 TEL: 03-3823-2241 (代表)
 https://www.tobunken.go.jp/

周辺地図



●鉄道

JR鶯谷駅下車 南口より徒歩10分

JR上野駅下車 公園口より徒歩15分

東京メトロ: 銀座線・日比谷線上野駅下車 徒歩20分

千代田線根津駅下車 徒歩20分

京成電鉄: 京成上野駅下車 徒歩20分



奈良文化財研究所



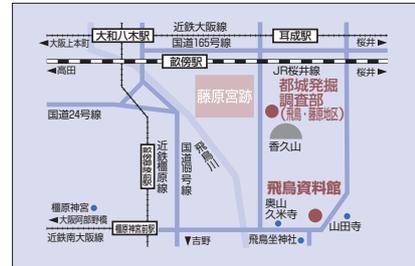
〒630-8577
 奈良県奈良市二条町2-9-1
 TEL：0742-30-6733（代表）
<https://www.nabunken.go.jp/>

周辺地図 平城地区



奈良文化財研究所・平城宮跡資料館
 ●鉄道
 近鉄大和西大寺駅北口から徒歩10分
 ●バス
 JR・近鉄奈良駅より奈良交通バス「二条町」下車

飛鳥・藤原地区



都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
 近鉄大和八木駅よりタクシーで20分
 飛鳥資料館
 ●タクシー
 近鉄橿原神宮前駅よりタクシーで20分
 ●バス
 近鉄橿原神宮前駅、飛鳥駅より明日香周遊バス（かめバス）「明日香奥山・飛鳥資料館西」下車、又は近鉄桜井駅より奈良交通バス「飛鳥資料館」下車

利用案内

●平城宮跡資料館

開館時間／9：00～16：30（入館は16：00まで）（無料）
 休館日／月曜日（祝日・休日の際は開館し、翌平日休館）、年末年始（12月29日～1月3日）
 お問合せ／奈良文化財研究所研究支援推進部連携推進課：
 0742-30-6753

●藤原宮跡資料室

開館時間／9：00～16：30（無料）
 休館日／年末年始（12月29日～1月3日）および展示替え
 お問合せ／奈良文化財研究所都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）：
 0744-24-1122

●飛鳥資料館

開館時間／9：00～16：30（入館は16：00まで）
 休館日／月曜日（祝日・休日の際は開館し、翌平日休館）
 年末年始（12月26日～1月3日）
 観覧料／一般350円 大学生200円
 ※特別展は別料金場合があります。
 ※障がい者とその介護者1名は無料
 ※満70歳以上、高校生以下及び満18歳未満は無料
 お問合せ／飛鳥資料館：0744-54-3561

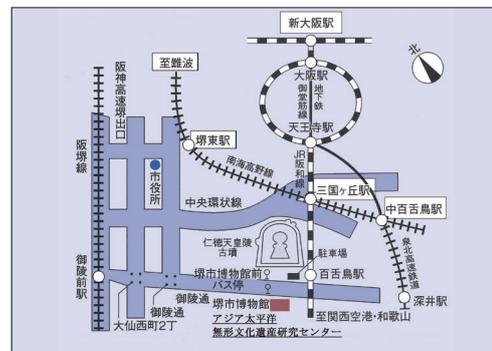


アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI)



〒590-0802
 大阪府堺市堺区百舌鳥夕雲町2丁（堺市博物館内）
 TEL：072-275-8050（代表）
<https://www.irci.jp/jp/>

周辺地図



●鉄道
 JR西日本阪和線・関西空港線「百舌鳥」駅下車徒歩6分
 ●バス
 南海バス「堺市博物館前」下車徒歩4分

国立文化財機構の事業

国立文化財機構は、次のような事業を展開しています。

1 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承

歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点として、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵品の蓄積を図る観点から、各国立博物館はその収集方針に沿って適時適切な収集に努めています。

寄贈品や寄託品の受入れについても、文化庁とも連携し、登録美術品制度の活用や相続税の猶予措置などといった税制面での環境整備を進めるなど、積極的に取り組んでいます。

また、国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えていくため、収蔵品の管理を徹底し、文化財の保存環境を整備するとともに、修理・保存処理を必要とする収蔵品については、機構の保存科学研究者と機構内外の修復技術の担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次計画的に修理を行い、文化財保存修理所等は文化財防災も視野に入れながら、国と協力して整備充実を図っています。

■収集

体系的・通史的にバランスの取れた所蔵品の蓄積を図るため、また、有形文化財の散逸や海外流失を防ぐため、有形文化財の収集（購入・寄贈・寄託）に不断の努力を続けています。

また、4博物館それぞれの特色を生かし平常展を更に充実させるため、社寺や個人が所有する文化財の寄託を受け入れています。

所蔵品

(件) [参考]

合計			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館			奈良文化財研究所	
総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	国宝	重文
131,771	135	1,006	120,073	89	648	8,279	29	200	1,930	13	114	1,489	4	44	1	5

(令和4年3月31日現在)

寄託品

(件)

合計			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文
12,513	199	1,203	2,651	54	262	6,562	90	619	1,956	53	309	1,344	2	13

(令和4年3月31日現在)

■保存・修理

有形文化財はおおよそ100年に1回の本格修理を重ね、今日まで伝世しています。機構では日常的な展示・保管のための応急（対症）修理や、収蔵品の損傷の進行状況に合わせた計画的な本格修理を実施しています。

(2) 展覧事業

常に来館者のニーズ、最新の学術的動向などを踏まえ、かつ国際文化交流にも配慮しながら質の高い展示、魅力ある展覧会を開催することにより、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化についての理解が深められるよう、国内外への情報発信に努めています。

また、来館者に親しまれる施設を目指し、「新しい生活様式」にも配慮した、開館時間の柔軟な設定、施設の多言語化、バリアフリー化、各種案内の充実など、より良い観覧環境の整備とお客様の声を伺いながら管理運営の見直し改善を行うなど、常に来館者の立場に立った展覧事業に努めています。

■展示・公開

国宝・重要文化財をはじめとする古美術品や考古資料等の文化財に接し、美や感動を味わっていただくため、各国立博物館の特色を十分に発揮した平常展・特別展等を開催しています。また、海外の博物館・美術館とも協力・連携して、相互に文化を紹介する展覧会を開催しています。

■博物館来館者数（令和3年度）

合計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
1,435,862人	836,720人	132,793人	253,196人	213,153人



令和4年1月に新設された展示コーナー「欧州を魅了した伊万里焼」（九州国立博物館）



東京2020オリンピック・パラリンピック開催記念 特別企画「スポーツ NIPPON」（東京国立博物館）
（令和3年7月13日～9月20日）

（3）教育・普及活動

日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化についての理解促進を図るため、「新しい生活様式」にも配慮しつつ、学校や社会教育団体などと連携協力しながら、講演会、ワークショップ等の学習機会を提供しています。また、教育活動の更なる充実を図るためのボランティア活動の支援や、大学との連携事業、博物館関係者・修理技術者等を対象とした研修等による人材育成等の事業も行っていきます。

また、文化財情報や、各種資料の収集と公開、展示や教育事業等、積極的にウェブを活用し、国内外へ広報をしています。



ウェブサイト「京博ものがたり」・動画「今日から君も狛犬博士」
いずれも多言語で制作（京都国立博物館）



大分県オンライン中継プログラムの活動風景（奈良国立博物館）

（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究

有形文化財の収集・保管・展示事業・教育活動等に関する調査研究を計画的に実施し、先進的かつ有用な情報を集積し調査研究を行っています。

その成果などを刊行物やウェブサイト活用などの様々な方法で広く公開することにより、次世代への継承及び我が国の文化の向上に寄与しています。

三雲南小路遺跡（福岡県糸島市）の王墓を実寸大で再現した。甕棺の埋葬方法を学びながら埋葬する、される体験ができる。
（九州国立博物館）



（5）国内外の博物館活動への寄与

収蔵品を国内外の展覧会でも活用していただけるよう、保存状態や保存環境などを総合的に勘案し、国内外の博物館等へ積極的に貸与しています。

また、専門的・技術的な指導・助言を行い、国内外の博物館や美術館等との情報交換に努めています。

国際シンポジウム「ミュージアムとオンライン 実践と展望」
（オンライン開催）（令和4年1月29日）



(6) 文化財の積極的な活用による文化財の継承につなげる新たな取組

文化財が持つ新たな魅力や価値を引き出し、文化財を通じた豊かな体験と学びを提供することで、文化財の次世代への確実な継承のみならず、地方創生、観光振興につながる新たな活用のあり方を目指します。



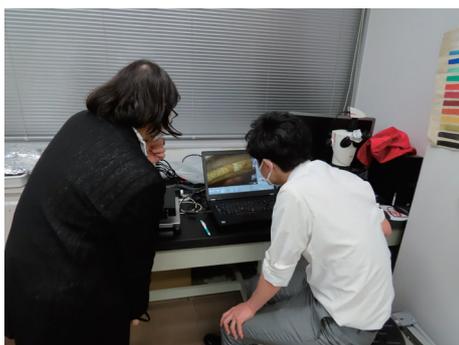
「日本美術のデジタル年表」の制作・展示（東京国立博物館内で公開）（文化財活用センター）

2 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査研究を行っています。

(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

国内外の機関との共同研究や研究交流を含め、文化財に関する基礎的・体系的な調査研究や文化財の保存・活用のための調査研究に取り組んでいます。その成果は、基礎的データの増大や学術的知見の蓄積、文化財指定等の基礎資料の提供につながり、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関し、個別的・総合的に寄与しています。



伝平等院須弥壇剥落螺鈿貝片調査の様子（東京文化財研究所）



佐渡市小木町（新潟県）の町並み調査（奈良文化財研究所）

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

文化財の価値や保存に関する研究の進展を図るため、次のような研究開発及び調査研究に取り組んでいます。

- ①文化財の調査手法に関する研究開発を推進し、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与しています。また、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与しています。
- ②文化財の保存科学や修復技術・修復材料・製作技法に関する中核的な研究拠点として、最新の科学技術を応用し、文化財研究としての新たな技術の開発を進め、国内外の機関との共同研究や研究交流を図り、先端的な調査研究を推進しています。



ハイパースペクトルカメラを用いた絵画の材料調査（東京文化財研究所）

(3) 文化遺産保護に関する国際協働

海外の文化遺産情報の収集・研究・発信や、諸外国での文化遺産保護協力事業実施のほか、文化遺産の保存・修復に関する人材育成や技術移転などの事業を総合的に展開することで、我が国が有する文化遺産保護に関する知識・技術・経験を活かしながら、この分野での国際協力を推進しています。また、アジア太平洋地域において活動する研究者や研究機関等を支援し調査研究活動を促進するとともに、関係機関と連携のもと、自然災害等によって危機に瀕したものに重点を置きつつ当該地域の無形文化遺産保護のための調査研究を行うなど、人類共通の財産である有形・無形の文化遺産の保護のための活動を通じて、諸外国との文化的交流及び相互理解の促進に貢献しています。



「無形文化遺産のSDGsへの貢献」事業に関するワークショップ(バングラデシュ)(アジア太平洋無形文化遺産研究センター)

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用

文化財に関する資料の収集・整理・保管を行うとともに、情報や調査研究の成果を広く外部に公開・提供するために、文化財に関する資料の電子化の推進及び専門的アーカイブの拡充、公開講演会や国際シンポジウムの開催、各施設ウェブサイトの充実などに取り組んでいます。また、奈良文化財研究所の平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館においては、調査研究成果に関する展示を充実させ、広く一般の方に理解を深めていただけるよう努めています。



第55回オープンレクチャーの様子(東京文化財研究所)

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

これまでの調査研究成果を活かし、地方公共団体等のニーズを踏まえた研修を実施し、知識・技術の向上に寄与するとともに、連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材育成を行っています。また、平成23年に発生した東日本大震災では、文化庁の要請により行った文化財等救援活動において、中心的な役割を担いました。この経験を活かし、今後予想される巨大地震等大規模災害に対し文化財等の防災・救援等を行うネットワークを構築するため、全国的な連携・協力体制の整備に向けて調査研究、人材育成等を行っています。



遺跡技術調査課程 講義の様子(奈良文化財研究所)

(6) 文化財防災に関する取組

今後起こりえる巨大地震から、毎年のように起こる洪水まで、繰り返し起こる多様な災害に対して、文化財の防災・救援のための連携・協力体制の構築に取り組むとともに、災害発生時には専門的な知見から必要となる支援を行います。また、救援活動や防災・減災のためのガイドラインの作成、展示方法や収蔵環境等における防災力向上のための技術開発、そして、文化財防災に関する地域の専門的人材の育成を図るための研修会の開催などの取り組みを行っています。



崇道天皇社(奈良県奈良市)檜皮葺屋根焼損箇所現地調査(文化財防災センター)

TNM 東京国立博物館

我が国の人文系の総合的な博物館として、日本を中心として広くアジア諸地域にわたる文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。



東京国立博物館長
藤原 誠

東京国立博物館は、明治5年（1872）に東京の湯島聖堂大成殿で開催された文部省博覧会の開幕をきっかけに「文部省博物館」として発足し、今日まで続く日本で最も長い歴史を持つ博物館です。

国宝・重要文化財をはじめ、日本を中心に広くアジア諸地域にわたる約12万件の有形文化財を収集し、それらの魅力を広く世界へ発信するとともに、大切に守り未来へと継承する使命を担っています。

令和4年（2022）は創立150年の節目にあたります。激動の世界情勢の中にあってこのような大きな節目を迎えたことは、発足から幾多の変遷を経て、戦後「国民の博物館」となった東京国立博物館がこれまでに果たしてきた役割を改めて振り返る機会になりました。

博物館の存在意義や使命をふまえ、今後も調査研究、収集、保管、修理といった事業を着実に実施し、より多くの方と文化財の魅力や博物館の楽しさを分かち合えるような展示、教育普及や新たな事業を展開していくことで、過去と現在、そして未来への懸け橋として、新たな一歩を踏み出してまいります。

■展示・公開

●総合文化展

総合文化展は、当館の収蔵品、寄託品を展示するもので、当館の展示事業の中核を成すものです。年間400回程度の展示替を定期的に実施しています。

各展示館ごとの特色は次のようになっています。

本館：2階は縄文時代から江戸時代までの日本美術の流れをたどる時代別展示、1階は彫刻、陶磁、刀剣などのジャンル別展示で構成しています。

東洋館：中国、朝鮮半島、東南アジア、西域、インド、エジプトなどの美術と工芸、考古遺物を展示しています。

平成館：考古展示室（1階）では、土偶、銅鐸や埴輪をはじめとする旧石器時代から江戸時代までの考古遺物を展示し、企画展示室（1階）では特集や教育普及事業に関連した展示などを行っています。

法隆寺宝物館：奈良の法隆寺から皇室に献納された宝物300件余りを収蔵・展示しています。

表慶館：近年は、特別展の展示会場やイベント会場として活用しています。

黒田記念館：日本近代画家の黒田清輝の遺言により竣工された建物です。黒田清輝の作品を展示・公開しています。

●特集

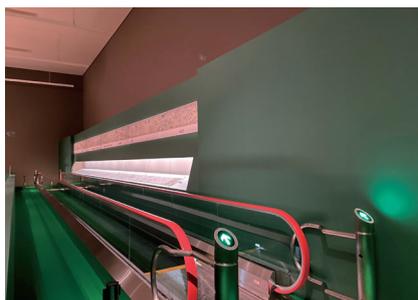
※開催期間は変更になる場合がございます。

総合文化展の一部として、特にテーマ性、企画性の高い内容で構成する特集を行っています（展示期間は予定です）。

- ・「未来の国宝—東京国立博物館 書画の逸品—」（令和4年4月12日～令和5年3月26日）
- ・「東博のガラスコレクション—明治期ガラス工芸の諸相—」（令和4年7月12日～9月4日）
- ・「東京国立博物館の模写・模造—草創期の展示と研究—」（令和4年9月6日～10月30日）
- ・「未来の国宝—東京国立博物館 彫刻、工芸、考古の逸品—」（令和4年9月6日～12月25日）
- ・「中国書画精華—宋代書画とその広がり—」（仮）（令和4年9月21日～11月13日）
- ・「近世能狂言面名品選—「天下一」号を授かった面打—」（令和5年1月2日～2月26日） ほか



特集「博物館に初もうで 今年は一ハク150周年！めでタイガー!!」（令和4年1月2日～30日）



特別展「国宝 鳥獣戯画のすべて」会場の様子
（令和3年4月13日～6月20日）
※4月25日～5月31日は臨時休館



「春夏秋冬／フォーシーズンズ 乃木坂46」
（令和3年9月4日～11月28日）

●特別展

研究成果の公開の場として、またお客様の関心に応える場として、特別展を開催しています。以下は令和4年度に開催する展覧会です。

※開催期間は変更になる場合がございます。

- ・特別展「空也上人と六波羅蜜寺」(令和4年3月1日～5月8日)
- ・沖縄復帰50年記念 特別展「琉球」(令和4年5月3日～6月26日)
- ・東京国立博物館創立150年記念 特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」(令和4年10月18日～12月11日)

■文化財の収集・保管・修理

日本を中心とするアジア諸地域の文化財の体系的な陳列を目指し、購入・寄託・寄贈によって、文化財の収集に努めています。年月を経て劣化した文化財を将来にわたって安全に公開できるように、展示室や収蔵庫の環境改善、展示・輸送方法の改良、文化財の状態診断を実践しています。令和3年度は年間約50件の本格修理や年間約200件の応急(対症)修理を行いました。

■教育普及

来館者にとってのより良い博物館体験の創出を目指して、多くの人々が博物館に親しみを感じられる機会の提供と、日本と東洋の文化の理解を深めるための手助けを行います。学校等との連携やボランティア活動の支援を行うとともに、先導的な事業のモデル化を図り、我が国の中核の博物館にふさわしい教育普及活動を実施しています。

- 学習機会の提供：ギャラリートーク、講演会、連続講座、ワークショップ、バックヤードツアー、その他
- 教育普及的展示：親と子のギャラリー、日本文化のひろば
- 学校との連携：スクールプログラム(鑑賞支援・職場体験・盲学校対応)、教員研修
- 大学との連携：キャンパスメンバーズ制度、インターンシップ学生の受入
- ボランティア活動：各種教育普及、館内案内、ガイドツアー等
- 150周年事業：月イチ! トーハクキッズデー、子どもたちの描く「みんなで作る記念チケット」、トーハクジュニア学芸員プログラム、演劇ツアー「トーハク劇場へようこそ! ~博物館の誕生編~」、触察ツールやセンサリーマップの開発等
- ※一部プログラムをオンラインに変更しています。
- ※新型コロナウイルスの影響により、変更・中止となることがございます。



月例講演会の様子



親と子のギャラリー「まるごと体験! 日本の文化 リターンズ」会場の様子

■調査研究

日本を中心に広くアジア諸地域にわたる文化財について計画的な調査研究を実施し、文化財の収集・保存・展示活動に反映しています。調査研究には科学研究費補助金や文化活動の助成金も活用しています。

令和4年度の研究テーマの一部を紹介します。

- ・特別調査「法隆寺献納宝物」「書跡」「工芸」「彫刻」「絵画」「考古」
- ・関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査研究
- ・東洋民族に関する調査研究
- ・美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究
- ・「東京国立博物館の近世仏画一伝統と変奏」ほか特集に関連する調査研究



特別調査「絵画」 仏画調査の様子

沿革

明治5年(1872)	旧湯島聖堂の大成殿で開催された日本初の博覧会を機に、「文部省博物館」として発足
明治8年(1875)	内務省所管となる。陳列区分は天産、農業山林、工芸器械、芸術、史伝、教育、法教、陸海部の8部門
明治15年(1882)	上野寛永寺本坊跡の現在地に移転
明治22年(1889)	宮内省所管の「帝国博物館」となる
明治33年(1900)	「東京帝室博物館」と改称
明治42年(1909)	表慶館が開館
大正12年(1923)	関東大震災により、旧本館が損壊
大正14年(1925)	天産部の別品を文部省の東京博物館(現在の国立科学博物館)などに移管
昭和13年(1938)	現在の本館が開館
昭和22年(1947)	文部省に移管「国立博物館」と改称
昭和27年(1952)	「東京国立博物館」と改称
昭和39年(1964)	法隆寺宝物館(旧館)が開館
昭和43年(1968)	文化庁の発足により同行に移管。東洋館が開館
昭和59年(1984)	資料館が開館
平成11年(1999)	法隆寺宝物館が開館、つづいて平成館が開館
平成13年(2001)	独立行政法人国立博物館東京国立博物館となる
平成19年(2007)	独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館となる

施設概要

土地面積	120,270 (黒田記念館、柳瀬荘含む)		
建 物	建築面積	23,651	延 面 積 78,471
	展示館	展示面積 計	18,567
		収蔵庫面積 計	11,654
本 館	建築面積	6,602	延 面 積 22,416
	展示面積	6,941	収蔵庫面積 3,829
東 洋 館	建築面積	2,892	延 面 積 12,531
	展示面積	4,250	収蔵庫面積 1,379
平 成 館	建築面積	5,542	延 面 積 19,406
	展示面積	4,471	収蔵庫面積 2,446
法隆寺宝物館	建築面積	1,935	延 面 積 4,031
	展示面積	1,462	収蔵庫面積 291
表 慶 館	建築面積	1,130	延 面 積 2,077
	展示面積	1,179	収蔵庫面積 0
黒田記念館	建築面積	724	延 面 積 1,996
	展示面積	264	収蔵庫面積 25
そ の 他		延 面 積	16,014
	建築面積	4,826	収蔵庫面積 3,684



京都国立博物館

京都に都が置かれた平安時代から江戸時代の京都文化を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。



京都国立博物館長
松本 伸之

京都は、8世紀末の平安京遷都以降、19世紀後半の明治維新に至るまで、1千年余りの長期にわたって日本の都として繁栄し、日本文化の中核としての機能を担ってきました。

京都国立博物館は、こうした伝統の地である京都の東山の一角に明治30年（1897）に開館しました。以来、京都の有形文化財を核として、日本の伝統文化を保存・継承し、同時にその価値や魅力を国内外へ広く発信することを大きな目的としています。

近年の激動の情勢にあっても、新たな生活様式やSDGsを念頭に置きながら、高水準な活動を維持し、国際化、情報化への対応も深めるよう努めてまいりました。今後も、施設の老朽化などの改善を図りつつ、学校教育や生涯学習の拠点、探求や創造の場、癒しの空間、あるいは観光の拠点など、誰もが利用しやすく、充実した時間を過ごしていただけるような施設を目指し、邁進してまいります。

■ 展示・公開

● 名品ギャラリー

平成26年9月にオープンした「平成知新館」名品ギャラリーでは、陶磁・考古・絵画・書跡・工芸・彫刻といった分野ごとに展示室が設けられており、様々なテーマの下、収蔵品・寄託品をあわせ約1万5千件の収蔵品の中から選ばれた作品が展示されており、京文化の神髄をお楽しみいただけます。随時展示替が行われており、足を運ぶ度、新たな作品との出会いがあります。



平成知新館

● 特別展等

※開催期間は変更となることがございます。

- ・ 伝教大師1200年大遠忌記念 特別展「最澄と天台宗のすべて」令和4年4月12日（火）～5月22日（日）
- ・ 特別展「河内長野の霊地 観心寺と金剛寺—真言密教と南朝の遺産—」令和4年7月30日（土）～9月11日（日）
- ・ 特別展「京に生きる文化 茶の湯」令和4年10月8日（土）～12月4日（日）
- ・ 親鸞聖人生誕850年 特別展「親鸞 生涯と名宝」令和5年3月25日（土）～5月21日（日）

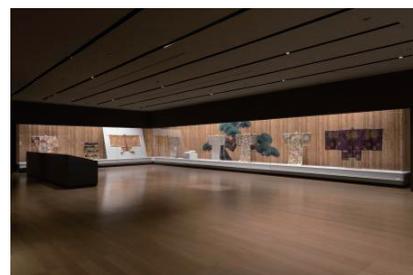
※なお、現在は明治古都館（本館）が休館中のため、名品ギャラリーと特別展を交互に開催しております。



特別企画「オリンピック×ニッポン・ビジュツ」
(令和3年6月5日～7月4日)



特別展「京の国宝—守り伝える日本のたから—」
(令和3年7月24日～9月12日)



特別展「畠山記念館の名品—能楽から茶の湯、そして琳派—」
(令和3年10月9日～12月5日)

■ 文化財の収集・保管・修理

京都国立博物館では設立以来、社寺に伝来してきた名宝の寄託を多数受けています。また、京都文化に関する美術・考古資料をはじめとする文化財の購入及び寄贈によって、収蔵品は年々増加しています。

こうした文化財を後世に伝えるためには、適切な修理や保存処置を施す必要があります。昭和55年には日本で最初の総合的文化財修理専用施設として、文化財保存修理所が業務を開始しました。



文化財保存修理所での修理風景

■教育普及

展覧会及び展示作品への理解を深め、文化財への関心を高めるために、展覧会・ウェブサイト・教育現場などを通して様々な事業を行っています。

○展覧会内容及び展示作品の理解を深めるための活動
・「土曜講座」「記念講演会」などの講演会、鑑賞ガイドやワークシート、博物館ディクショナリー等の配布、ジュニア版音声ガイドの貸出

○文化財への関心を高めるための活動

・夏期講座・シンポジウムなどの講演会、入門的な特集

展示の開催、高精細デジタル複製美術品を用いた文化財ソムリエによる京都市内小中学校への訪問授業（文化財に親しむ授業）の実施、ウェブサイトや動画などオンラインコンテンツの制作・公開

○教育機関との連携・協力活動

・キャンパスメンバーズ制度、京都大学大学院人間・環境学研究科の歴史文化社会論講座担当、文化財ソムリエの育成、訪問授業、複製を活用した授業への支援、鑑賞会の実施、教員に向けた研修会の実施

○ボランティア活動の支援

・文化財ソムリエの運営・育成

※新型コロナウイルスの影響により、変更・中止となることがございます。



夏期講座
(令和3年7月2日・3日)



新春特集展示「寅づくし一干支を愛する一」
(令和4年1月2日～2月13日)

■調査研究

当館では京都市を中心とした近畿地方の古社寺の文化財悉皆調査を昭和54年度から実施しています。その成果として報告書「社寺調査報告」を刊行しています。その他、収蔵品等についての調査研究を継続しており、その成果を展示や研究紀要「学叢」などを通じて公表しています。



社寺調査風景

■その他の活動

博物館に親しんでいただくための様々なイベントを実施しています。

○京都・らくご博物館

我が国の伝統文化であり、京都が発祥の地である落語を「京都・らくご博物館」と題して、定期的上演しています。



京都・らくご博物館

沿革

明治22年(1889) 宮内省所管「帝國京都博物館」として設置
明治30年(1897) 開館(5月1日)
明治33年(1900) 「京都帝室博物館」と改称
大正13年(1924) 京都市に下賜、「恩賜京都博物館」と改称
昭和27年(1952) 恩賜京都博物館を国に移管、文化財保護委員会の附属機関として「京都国立博物館」と改称
昭和41年(1966) 平常展示館が開館
昭和43年(1968) 文化庁の附属機関となる
昭和44年(1969) 特別展示館、表門、同札売場及び袖塀が「旧帝國京都博物館」として重要文化財に指定
昭和48年(1973) 第1回土曜講座開講
昭和55年(1980) 文化財保存修理所業務開始
平成9年(1997) 開館100周年記念式典開催(10月)
平成13年(2001) 百年記念館(仮称)新築事業の一環として南門が竣工
平成13年(2001) 「独立行政法人国立博物館 京都国立博物館」となる
平成19年(2007) 「独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館」となる
平成21年(2009) 新展示館「平成知新館」建替え工事を開始
平成25年(2013) 「平成知新館」竣工(8月)
平成26年(2014) 「平成知新館」開館(9月)
平成29年(2017) 開館120周年記念式典開催(5月)

施設概要

		(m ²)	
土地面積			53,182
建 物	建築面積	13,077	延 面 積 30,872
展 示 館	展示面積 計		5,657
	収蔵庫面積 計		4,889
明治古都館(本館) (展示休止中)	建築面積	2,896	延 面 積 3,015
	展示面積	2,070	収蔵庫面積 803
平成知新館	建築面積	5,568	延 面 積 17,997
	展示面積	3,587	収蔵庫面積 2,710
旧管理棟	建築面積	606	延 面 積 1,988
資料棟	建築面積	414	延 面 積 1,125
文化財保存修理所	建築面積	821	延 面 積 2,786
技術資料参考館	建築面積	101	延 面 積 304
東収蔵庫	建築面積	811	延 面 積 1,471
			収蔵庫面積 880
北収蔵庫	建築面積	310	延 面 積 682
			収蔵庫面積 496
そ の 他	建築面積	1,550	延 面 積 1,504



奈良国立博物館

仏教美術及び奈良を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。



奈良国立博物館長
井上 洋一

奈良国立博物館は、明治28年(1895)の開館以来、南都諸社寺の御協力をいただきながら、仏教美術を中心とした文化財の収集・保管・調査研究や教育普及活動を行い、神と仏が融合した我が国の仏教文化のもつ優れた芸術性やその背景にある歴史について紹介してまいりました。今後は、こうした当館の特色を基盤に、様々な文化財と奈良のもつ歴史・文化的景観の有機的な連携を念頭に、新たな奈良文化の発信の拠点として、国際化や情報化への一層の充実に努め、広く国民の皆様親しんでいただける博物館を目指します。

■展示・公開

●仏教美術の展示

当館では、特別展や特別陳列以外にも、国宝・重要文化財を多数含む選りすぐりの仏教美術の名品を公開しています。なら仏像館では、名品展「珠玉の仏たち」と題し、主として飛鳥から鎌倉時代にいたる日本の彫刻史を代表する優れた仏像の数々を、渡り廊下でつながれた青銅器館では、中国古代の青銅器の逸品を展示しています。また、西新館では、名品展「珠玉の仏教美術」と題し、絵画・工芸・書跡・考古の各ジャンルにわたる日本仏教美術の粋ともいべき作品群をご覧いただけます。さらに、随時、ジャンルの枠にとらわれない特集展示なども開催しています。

●特別陳列

※開催期間は変更になる場合がございます。
・お水取り(令和5年2月4日～3月19日)

●特別展

※開催期間は変更になる場合がございます。
・特別展「大安寺のすべて一天平のみほとけと祈りー」(令和4年4月23日～6月19日)
・貞享本當麻曼荼羅修理完成記念 特別展「中将姫と當麻曼荼羅一祈りが紡ぐ物語ー」(令和4年7月16日～8月28日)
・第74回 正倉院展(令和4年秋)(予定)



聖徳太子1400年遠忌記念 特別展「聖徳太子と法隆寺」
(令和3年4月27日～6月20日)



特別展「奈良博三昧ー至高の仏教美術コレクションー」
(令和3年7月17日～9月12日)

■文化財の収集・保管・修理

貴重な国民の財産である有形文化財を守るため、購入・寄贈・寄託により有形文化財の収集に努力しています。我が国に伝わる文化財は紙や木など脆弱な材質のものが多く、これらを後世にいかに関長く伝えるかが大きなテーマになっています。

そこで当館では、収集した文化財及び展示室や収蔵庫の保存環境を常時適切な温湿度管理で実施し、細心の注意を払っています。また、当館では平成14年に文化財保存修理所を設置し、文化財の計画的修理も実施しています。

■教育普及

文化財に対する理解を深めるため、様々な教育普及活動に力を入れています。

- ①児童・生徒を対象とした事業
主に小学生を対象とした世界遺産学習、学校団体を対象としたオンライン中継プログラム、こども向け作品解説の設置
- ②講演会・講座等の実施
公開講座、サンデートーク、夏季連続講座、正倉院学術シンポジウム、国際研究集会
- ③大学等との連携
キャンパスメンバーズ制度、インターンシップ学生の受入れ、奈良女子大学及び神戸大学との連携講座、奈良教育大学と連携したワークショップ
- ④ボランティア活動の充実
※新型コロナウイルスの影響により、変更・中止となることがございます。

■調査研究

文化財に関する調査研究は、研究機関である奈良国立博物館の根幹を支える最も重要な活動です。その成果は名品展や特別展に反映され、展示活動の充実に資するとともに、これまで蓄積された学術情報資料は仏教美術資料研究センターで広く公開しています。当館では、令和4年度も以下のテーマで調査研究を行い、着実な成果をあげてまいります。

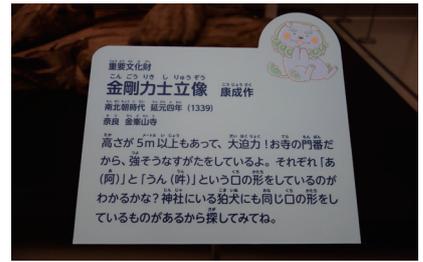
- ①所蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究
- ②復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究
- ③古代・中世の写経と聖教に関する基礎的研究
- ④仏教工芸・上代工芸の総合的調査
- ⑤寺院出土品の調査研究
- ⑥南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究
- ⑦東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究
- ⑧特別展等の開催に伴う調査研究
- ⑨歴史・伝統文化の教育普及に資するための調査研究
- ⑩収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響などに関する調査研究
- ⑪文化財修理の観点からの収蔵品等の調査研究
- ⑫保存科学の観点からの収蔵品等の調査研究

沿革

明治22年(1889)	宮内省所管の「帝国奈良博物館」として設置
明治28年(1895)	開館(4月29日)
明治33年(1900)	奈良帝室博物館と改称
大正3年(1914)	正倉院掛が置かれる
昭和22年(1947)	宮内省より文部省に移管される
昭和25年(1950)	文化財保護委員会附属機関となる
昭和27年(1952)	奈良国立博物館と改称
昭和43年(1968)	文化庁の附属機関となる
昭和48年(1973)	陳列館新館(西新館)開館
昭和55年(1980)	仏教美術資料研究センター設置
平成7年(1995)	開館百周年記念式典挙行
平成10年(1998)	第2新館(東新館)開館
平成13年(2001)	「独立行政法人国立博物館 奈良国立博物館」となる
平成14年(2002)	文化財保存修理所開所 本館附属棟を中国古代青銅器の展示室とする(現在の青銅器館)
平成19年(2007)	「独立行政法人国立文化財機構 奈良国立博物館」となる
平成22年(2010)	本館を「なら仏像館」と改称
平成28年(2016)	なら仏像館リニューアルオープン(4月29日)

施設概要

		(m ²)	
土地面積		78.760	
建 物	建築物	建築面積	6.786 延面積 19.133
	展示館	展示面積 計	4.079
なら仏像館	なら仏像館	収蔵庫面積 計	1.806
		建築面積	1.512 延面積 1.512
	展示面積	1.261	
	青銅器館	建築面積	341 延面積 664
		展示面積	470
	東新館	建築面積	1.825 延面積 6.389
		展示面積	875 収蔵庫面積 1.642
	西新館	建築面積	1.649 延面積 5.396
		展示面積	1.473
	仏教美術資料研究センター	建築面積	735 延面積 735
文化財保存修理所	建築面積	319 延面積 1.036	
地下回廊	延面積	2.152	
	収蔵庫面積	164	
その他	建築面積	405 延面積 1.249	



なら仏像館に設置しているこども向け作品解説



サンデートーク会場風景



奈良教育大学との連携事業「奈良博ぞんまい わいわい紙ずもうをつくろう！」



調査の様子

日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。



九州国立博物館長
(独立行政法人国立文化財
機構理事長)

島谷 弘幸

九州国立博物館(九博)は、日本文化の形成をアジアとの交流から考えるというコンセプトを柱に、平成17年(2005)に開館しました。これまでの間、地域の方をはじめとする多くの皆様からの温かい応援に支えられ、おかげさまで1,750万人を超える来館者をお迎えすることができました。

コロナ禍により世の中の様々なことが変革を迫られるなか、ご自宅でも文化財に親しめるようにインターネットでの情報発信を強化するなど、当館でも博物館の新しいありかたを模索しております。その一方で、先人から受け継いだ貴重な文化財を守り魅力を発信するという博物館の使命は、変わることはありません。これからの時代も、「学校より面白く、教科書より分かり易い」を目標に、皆様にとって親しみやすく、安心して楽しめる博物館を目指してまいります。

■展示・公開

●文化交流展(平常展)

文化交流展示室では、展示テーマを決めて期間限定で行う特集展示を開催し、いつでも新しい展示品に出会える場を皆様にお届けしています。更に、映像や実際に触れることができる展示により、迫力だけでなく臨場感に溢れる展示を行っています。

●特集展示

令和4年度実施予定の主な特集展示は次のとおりです。

- ・特集展示「きゅーはく女子考古部プレゼンツ かわいい考古学のススメ」(令和4年4月19日～7月24日)
- ・特集展示「御所の器—公家山科家伝来の古伊万里(仮)」(令和4年9月27日～11月20日)
- ・特集展示「種子島(仮)」(令和4年12月13日～令和5年2月12日)
- ・新春特別公開「徳川美術館所蔵 国宝 初音の調度」(令和5年1月1日～1月29日)

●特別展

※開催期間は変更になる場合がございます。

特別展は、初めての方でも十分楽しめる、よく知っている方は更に楽しめる、そんな展覧会を目指して企画・展示を行っています。令和4年度実施予定の特別展は次のとおりです。

- ・特別展「北斎」(令和4年4月16日～6月12日)
- ・沖縄復帰50年記念「琉球」(令和4年7月16日～9月4日)
- ・特別展「ポンペイ」(令和4年10月12日～12月4日)
- ・特別展「加耶」(令和5年1月24日～3月19日)

■文化財の収集・保管・修理

●収集

日本とアジア諸国との文化交流と日本文化の成り立ちを分かりやすく展示するための文化財(美術・工芸・考古・歴史及び民族資料等)を重点的に収集しています。また、展示の一層の充実を図るために、社寺や個人に対し、積極的に寄贈や寄託を働きかけています。

●保管

貴重な文化財を保存・管理する「収蔵庫」は、直接外気と接しないよう中間に空気層を設けた二重構造にするとともに、温湿度変化がより少ない建物の中心に配置しています。また、その空調設備は恒温恒湿仕様の空調機を採用し、庫内温湿度をほぼ一定に維持しています。更に、内装材料は地元九州各地から調達した杉板と調湿材を壁や天井に使用することで、空調設備のみに頼らない湿度環境を保っています。

当館は地震時の文化財の転倒などによる破損を防ぐために免震建物になっています。建物へ地震の揺れが直に伝わるのを防ぐことで、貴重な文化財を地震から守ることができます。

●修理

6つの文化財保存修復施設(補修紙作成等、古文書・書跡・典籍、絵画、彫刻、考古、漆工)では、伝統的技術と人文科学及び科学技術を融合した保存修理を実施しています。実際に修理を行っているのは、国指定文化財の修理実績がある技術者で、歴史、美術、工芸、考古などの各専門分野の研究者と、それぞれの専門的立場から意見を出し合い保存修理を進めています。また、最先端の成分分析装置や精密計測技術(蛍光X線分析装置・X線CT装置等)によって、修理対象文化財の科学的調査にも積極的に取り組んでいます。



特集展示「没後350年記念 明国からやってきた奇才仏師 范道生」
(令和3年7月17日～10月10日)



特集展示「琉球王国文化遺跡集積・再興事業 巡回展 手わざー琉球王国の文化ー」
(令和3年10月19日～12月12日)



特別展「海幸山幸一祈りと恵みの風景ー」
(令和3年10月9日～12月5日)

■教育普及・交流活動

●教育普及活動

①体験型展示室「あじっば」での活動

日本と交流のあった諸地域の生活文化を比較体験する体験型展示室で、教育キットの開発や教育機関と連携したプログラムの開発及び一般来館者が博物館の諸活動を体験できるプログラムの開発等を行っています。

②文化交流展・特別展開連プログラム等の開発・実施

- ・展示理解プログラムの開発・実施
- ・YouTubeを活用した展示紹介動画の公開
- ・ワークショップなどの動画配信「おうちdeきゅーはく」
- ・ワークショップの実施
- ・ガイドブックの制作

③学校用教育キット「きゅーぱっく」の貸出

④移動博物館車「きゅーはく号」の運行

⑤大学等との連携を強めるキャンパスメンバーズ制度の実施

⑥「きゅーはくの絵本」を通じた教育普及活動

⑦ボランティア活動の支援

展示室やバックヤードの案内をはじめ、施設の環境整備、ワークショップなどの多彩なボランティア活動を支援しています。

●交流活動

①近隣地域をはじめ、企業等と連携した交流事業の実施や施設の有効活用を図るなど利用サービスの向上に努めています。

②アジアを中心とした博物館交流の推進

・韓国国立扶餘博物館・国立公州博物館・国立韓国伝統文化大学校、中国の南京博物院・内蒙古博物院・中国文物交流中心・成都博物館・瀋陽故宮博物院、上海博物館、ベトナム国立歴史博物館、タイ文化省芸術局と学術文化交流協定を締結し、相互交流を推進しています。

③国際シンポジウム、講演会の開催

※新型コロナウイルスの影響により、変更・中止となることがございます。



ワークショップ
「絹の体験教室 KURUKURU SILK
～繭から糸取り編～」

■調査研究

当館のコンセプトである「日本とアジア諸国との文化交流」に関する調査研究や文化財の保存・修復のための科学的調査研究を実施することにより、その研究成果を文化財の収集・保管・展示に反映させています。また、これらの研究には（独）日本学術振興会による科学研究費助成事業等も活用しています。

- ・ X線CTスキャナ等による文化財の構造技法解析に関する調査研究
- ・ 特別展および文化交流展のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究
- ・ 博物館における国内・アジア地域及び北米・ヨーロッパの文化財保存修復に関する研究
- ・ 博物館の危機管理としての持続的 I PMシステムの研究



X線CTスキャナによる調査

■刊行物

当館の活動を広く理解してもらうために様々な刊行物を出版しています。

i) 研究紀要「東風西声」

—九州国立博物館の調査研究成果を冊子にしたもの（年1回発行）

ii) 季刊情報誌「アジアージュ」

—各展覧会のほか当館の魅力を紹介する広報誌（年4回発行）

iii) 「きゅーはくの絵本」

子どもたちに日本の歴史・文化を分かりやすく、親しみをもって理解してもらうために当館独自の絵本を制作しています。

iv) 「九州国立博物館文化財修理報告」(年1回発行)

沿革

平成6年(1994)	文化庁が「新構想博物館の整備に関する調査研究委員会」(以下、「委員会」という。)を設置
平成8年(1996)	文化庁が新構想博物館を九州国立博物館とし、その設置候補地が福岡県太宰府市に決定
平成9年(1997)	同委員会が「九州国立博物館 基本構想」を取りまとめ
平成11年(1999)	委員会が「九州国立博物館 基本計画」を策定
平成12年(2000)	文化庁、福岡県及び財団法人九州国立博物館設置促進財団(以下「財団」という。)が共同で「建築基本設計」を完了
平成13年(2001)	文化庁と福岡県が共同で設置した「九州国立博物館(仮称)設立準備専門家会議」が「常設展示計画」を策定
平成14年(2002)	文化庁、福岡県及び財団が共同で「展示基本設計」を完了
平成15年(2003)	文化庁、福岡県及び財団が「建設工事(3年計画の第一年次)」に着手
平成16年(2004)	文化庁、福岡県及び財団が「建設工事(2年計画の第一年次)」に着手
平成17年(2005)	文化庁、福岡県及び財団が「建設工事」を完了(建物が完成)
	文化庁、国立博物館及び福岡県が正式名称を「九州国立博物館」と発表
	国立博物館及び福岡県が「展示工事(2年計画の第二年次)」を完了

国立博物館が九州国立博物館を設置
10月16日 一般公開開始
「独立行政法人国立文化財機構 九州国立博物館」となる
平成19年(2007)
九州国立博物館で日中韓首脳会議を開催
平成20年(2008)
平成24年(2012)
平成27年(2015)
来館者1,000万人達成
開館10周年

施設概要

		(m ²)	
土地面積		159,844	
建 物	建築面積	14,623	
	延 面 積	30,675	
	法人 9,300	県 5,780	共用 15,595
展示・収蔵面積	展示面積 計	5,444	
	法人 3,844	県 1,375	共用 225
	収蔵庫面積 計	4,518	
	法人 2,744	県 1,335	共用 439

※土地・建物は福岡県と法人が共有しています。



東京文化財研究所



東京文化財研究所長
(独立行政法人国立文化財
機構理事)

齊藤 孝正

東京文化財研究所は、国の文化財行政を支える役割を果たすべく、有形・無形の様々な文化財全般について基礎的・体系的・先端的・実践的な調査研究を進めています。得られた成果等については、これを国内外に積極的に公表するとともに、地方公共団体等への文化財保護に関する指導・助言を行い、更には、アジアを中心とする諸外国における文化遺産の保護に関して、国際研修、人材育成や保存修復技術の移転といった国際協力事業を実施しています。

当面の重点課題としては、多年にわたり当研究所に蓄積されてきた各種の調査研究成果や基礎資料等について、アーカイブ構築を図るとともに、保存修復の分野においては、博物館資料の保存・修復・公開等に関する調査研究も視野に入れた国立文化財機構全体としての一体的な役割の推進、さらに、無形の文化財に関しては、芸能や伝統的な技術、祭礼行事等を中心に全国的な基礎資料の収集や映像記録等の作成、公開などに力点を置いて調査研究を行っています。

このほか、海外の文化遺産の保護に関し、我が国としての一体的・効果的な国際貢献を推進するための拠点組織である「文化遺産国際協力コンソーシアム」の事務局が当研究所内に置かれており、これを支援しています。

同時に、本部の文化財防災センターと協力し、東日本の拠点としての役割も担っています。

■研究組織

●文化財情報資料部

文化財情報資料部は、文化財研究のためのアーカイブの拡充を図ることを目指して、文化財に関する資料の収集・蓄積・整理・公開、及び効果的な情報発信方法の研究を進めています。同時に、文化財学や美術史研究等の今日的な課題にも取り組んでいます。あわせてこれらの成果を基にしながら、研究所全体の情報システムの管理や広報活動を担っています。

●無形文化遺産部

無形文化遺産部は、無形文化財、無形民俗文化財及び文化財保存技術という日本の無形の文化財を中心に、無形文化遺産全般を対象として、その保存継承に役立つような基礎的な調査研究を実施しています。また無形文化遺産の重要な保護手法である音声・映像による記録については、その作成の実施とともに新たな手法開発についての研究を行っています。

●保存科学研究センター

保存科学研究センターは、文化財の保存のために文化財の材料・構造・技法を調査し、文化財への理解を深める情報を収集しています。また文化財の修復のために修復材料・技法の改良と、維持管理手法の開発を行っています。新しい調査法導入も視野に活動しています。これらの調査研究は文化財の所蔵者や保存修復現場の方々と密接に協力しながら進めています。

●文化遺産国際協力センター

文化遺産国際協力センターは、アジア諸国をはじめとする世界各地での人材育成・技術移転を含む保存修復事業への協力、研究会の開催などによる国内外の機関との連携の推進、諸外国の文化遺産や保護制度に関する情報の収集・発信を行っています。また文化遺産国際協力コンソーシアム事務局を受託運営しています。



黒田清輝《湖畔》撮影の様子



感染対策を行った上で開催された南信州獅子舞フェスティバル



ノリウツギの安全な保存方法に関する現場検討



ドローンを用いた遺跡の保存状況調査（カンボジア）

■研修・助言・指導

文化財の保護とその活用を目指し、毎年開催している「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」、国際研修「紙の保存と修復」等の研修の他、「無形文化遺産保護に対する助言・指導」「博物館・美術館等の環境調査と援助・助言」「文化財の修復及び整備に関する調査・助言」など、さまざまな研修・助言・指導を行っています。

「博物館・美術館等保存担当学芸員研修」は社会的要請に応じ、令和3年度から文化財活用センターと連携・分担し、「基礎コース」「上級コース」を設けました。東京文化財研究所は「上級コース」を担当しています。



国際研修「紙の保存と修復」



博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）



第15回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座「樹木利用の文化一桜をつかう、桜を奏でる」より囃子演奏の様子

■大学院教育・公開講座

次世代の人材育成や研究成果の社会的還元を目指し、大学院教育や公開講座を行っています。大学院教育は、平成7年より東京藝術大学と連携し、システム保存学コースを開設しています。

また公開講座は、文化財情報資料部と無形文化遺産部がそれぞれ毎年開催しています。

■情報発信

調査研究、国際協力など、様々な活動の成果を、各種学会等での発表や研究会・シンポジウムの開催などを通じて積極的に発信・公開する取り組みを進めています。また『年報』『概要』『東文研ニュース』などの広報誌を刊行するとともに、ウェブサイトの充実に努めています。



東京文化財研究所総合検索
(<https://www.tobunken.go.jp/archives/>)

■刊行物

定期刊行物として『美術研究』『日本美術年鑑』『無形文化遺産研究報告』『保存科学』を刊行しています。そのほか、各種報告書の刊行などを通じて様々な研究成果を公表しています。



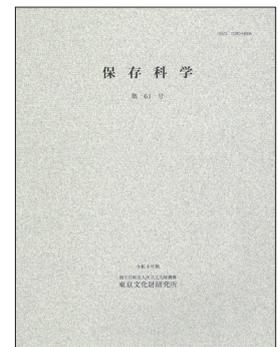
美術研究



日本美術年鑑



無形文化遺産研究報告



保存科学

沿革

昭和5年(1930) 帝国美術院に附属美術研究所が設置される
 昭和22年(1947) 国立博物館附属美術研究所となる
 昭和25年(1950) 文化財保護委員会の附属機関となる
 昭和27年(1952) 美術研究所は東京文化財研究所となる
 昭和29年(1954) 東京文化財研究所は東京国立文化財研究所となる
 昭和43年(1968) 文化庁の附属機関となる
 平成12年(2000) 新庁舎(新館)竣工・移転
 平成13年(2001) 独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所となる
 平成19年(2007) 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所となる

施設概要

		(m ²)
土地面積		4,181
建 物	建築面積	2,258
	延 面 積	10,516



奈良文化財研究所



奈良文化財研究所長
本中 眞

奈良文化財研究所は、貴重な文化財を実物に即して総合的に研究する組織で、歴史資料・建造物などの文化遺産の調査研究、平城宮跡・藤原宮跡を中心とする都城遺跡の発掘調査や展示・公開、飛鳥保存のための調査研究と展示普及などを行っています。また、「全国遺跡報告総覧」を通じて、遺跡情報データベースの充実・公開にも力を注いでいます。

これらの成果は、国内外の文化財研究に大きく寄与し、中国や韓国などアジア諸国をはじめとする諸外国との学術交流にも結実しています。同時に、調査研究の新たな技術・手法の開発、自治体専門職員への指導・研修なども行っており、研究所が開発した遺跡の保存・修復・整備の技術・手法は国内のみならず世界の遺跡でも広く活かされています。

私たちは、今後とも当研究所の特徴でもある異なる分野の学際的な共同研究を進め、文化財の保存・活用に貢献していきたいと考えています。

●企画調整部

企画調整部は、企画調整室、文化財情報研究室、国際遺跡研究室、展示企画室、写真室で構成されています。各研究室では、地方公共団体文化財担当職員等を対象とした専門研修の企画、情報システムの整備と各種データベースの公開、研究所における多言語化の推進、遺跡等に関する国際的な共同研究や協力、平城宮跡資料館等での研究成果の公開普及、写真の作成と新技術の開発などの業務を担っています。

●文化遺産部

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡・典籍・古文書・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡整備・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究を行っています。各研究室における多様な調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策など、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっています。また、地方公共団体の文化財行政に対しても、協力・助言等で貢献しています。

●都城発掘調査部

都城発掘調査部は、平城地区と飛鳥・藤原地区にそれぞれ考古第一・考古第二・考古第三・史料・遺構の研究室を置き、各地区に所在する古代宮殿や寺院、墳墓などで行う発掘調査に基づいて、学際的な調査研究を推進しています。その成果については説明会や報告書、展示などで公開するとともに、遺跡の保存・活用に資する研究にも取り組んでいます。

【平城地区】

奈良時代（710～784）の天皇の宮殿と中央官庁があった特別史跡平城宮跡の発掘調査とそれに基づく研究を主に担当しています。昭和34年（1959）から計画的な調査を継続し、これまでに130haに及ぶ平城宮跡の3分の1以上の発掘を進めてきました。平城宮跡や寺院の遺跡等で発掘された建物等の遺構、並びに木簡や木製品・土器・瓦等の遺物を基に、文献とも照合した実証的な奈良時代研究は、高く評価されています。また、平城宮跡を国営公園として整備している国土交通省に対し、整備の基礎資料となる平城宮跡の研究成果を提供しています。

【飛鳥・藤原地区】

我が国の古代国家成立期である7世紀から8世紀初頭にかけて、政治・経済・文化の中心地であった飛鳥・藤原地域の発掘調査とそれに基づく研究を担当しています。飛鳥地域には、宮殿や豪族の居館、飛鳥寺等の寺院のほか、銭貨や硝子などの工芸品を製作した総合工房や漏刻（水時計）台、墳墓などの遺跡があり、その北方には、我が国最初の本格的都城である藤原京が方5km以上の範囲に広がっています。飛鳥・藤原地域の遺跡の発掘調査に基づく実証的・学際的な研究は、飛鳥時代の歴史の解明に大きく貢献しています。



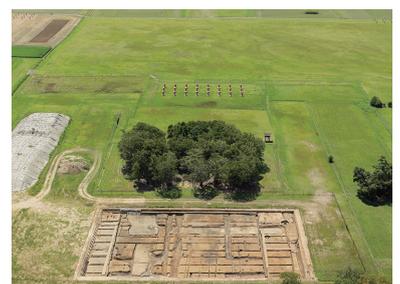
高松塚古墳壁画の記録写真撮影風景



復元建物の活用と出土品に因む地域間交流



平城宮東院地区で検出した大型掘立柱建物



藤原宮大極殿の発掘調査

●埋蔵文化財センター

埋蔵文化財センターは4つの研究室から成り、文化財の調査、研究、保存に関する実践的な研究と成果の研修等による普及に取り組んでいます。保存修復科学研究室は、考古資料の材質・構造の調査分析と保存修復、遺構の露出展示等に関する基礎研究から実践に及び研究を行っています。環境考古学研究室は、動植物遺存体の調査研究を通して古環境の復元や過去の動植物利用等に関する研究を行っています。年代学研究室は、年輪年代学の手法を用いて木質文化財の年代、産地、製作技法等に関する応用研究を進めています。遺跡・調査技術研究室は、文化財、考古学の研究及び手法の開発と活用を目的として、現在は考古資料を中心とした探査・計測技術や災害考古学の調査・研究に取り組んでいます。



遺跡現場での研修風景

●飛鳥資料館

飛鳥資料館は、飛鳥の歴史と文化を紹介する展示施設として、閣議決定に基づいて昭和50年(1975)に開館しました。常設展示として宮都・石造物・古墳・寺院などのテーマ展示とともに、保存処理を行った山田寺東回廊の出土部材を復元展示しています。また、特別展・企画展として、飛鳥の歴史や文化財に焦点を当てた展示や、奈良文化財研究所の多様な研究成果をわかりやすく伝える展示、写真コンテストの作品展などを開催しています。そのほか講演会や参加型イベントなどの企画も行っています。



常設第一展示室

●国際学術交流

奈良文化財研究所が現在実施している国際交流・協力事業は、学術共同研究や専門家交流、保存修復、専門知識・技術による支援や研修、そして文化庁の委託による文化遺産国際協力拠点交流事業などがあります。また、ユネスコ・アジア太平洋文化センター(ACCU)など他機関が行う文化財関連の国際貢献事業にも協力しています。

主な事業としては、①中国社会科学院との古代都城の比較を軸とした共同研究、②中国河南省文物考古研究院との窯跡遺跡出土遺物等の共同研究、③中国遼寧省文物考古研究院との三燕文化遺物の共同研究、④韓国国立文化財研究所との日韓古代文化の形成と発展に関する共同研究及び発掘調査交流、⑤カンボジア・アンコール・シムリアアップ地域文化財保護管理機構(APSARA)と連携した西トップ遺跡における研究調査・保存修復及び人材育成事業、⑥英国セインズベリー日本藝術研究所と連携した、オンラインリソースや出版物を通じた日本考古学の国際的発信、などがあげられます。また、文化庁委託による文化遺産国際協力拠点交流事業による技術移転・人材育成を、カザフスタン国立博物館を交流対象として実施しています。



「カザフスタンにおける考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」オンライン研修の様子

●刊行物

奈良文化財研究所では定期刊行物として『奈良文化財研究所紀要』『奈良文化財研究所概要』『奈文研ニュース』『埋蔵文化財ニュース』を刊行しています。そのほか、様々な研究成果を公表しています。

沿革

昭和27年(1952)	文化財保護委員会の附属機関として奈良文化財研究所(庶務室・美術工芸研究室・建造物研究室・歴史研究室)を奈良市春日野町50に設置
昭和29年(1954)	奈良国立文化財研究所と改称
昭和35年(1960)	奈良市佐紀東町の平城宮跡に発掘調査事務所を設置
昭和38年(1963)	平城宮跡発掘調査部を設置
昭和43年(1968)	文化庁が発足 その附属機関となる
昭和45年(1970)	平城宮跡資料館を開館
昭和48年(1973)	会計課・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・飛鳥資料館(準備室)を設置
昭和49年(1974)	庶務部(庶務課・会計課)と埋蔵文化財センターを設置
昭和50年(1975)	奈良県高市郡明日香村奥山に飛鳥資料館を開館
昭和55年(1980)	美術工芸研究室を奈良国立博物館の仏教美術資料研究センターに移管
昭和55年(1980)	庁舎を奈良市二条町2-9-1に移転 平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センターを庁舎に移転統合
昭和63年(1988)	飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎を橿原市木之本町94-1に新営
平成13年(2001)	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所となる
平成19年(2007)	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所となる
平成25年(2013)	本庁舎地区再開発計画に伴い、奈良市佐紀町247-1の仮設庁舎に移転
平成30年(2018)	本庁舎竣工に伴い、仮設庁舎から移転

施設概要

	土地	建物 (m ²)	
		建築面積	延面積
本庁舎地区	8,879	2,812	11,387
平城宮跡地区		10,631	16,150
藤原地区	20,515	6,016	9,477
飛鳥地区		2,657	4,404

アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI)

International Research Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region



アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長
岩本 渉

アジア太平洋無形文化遺産研究センター (IRCI) は、平成21年10月の国際連合教育科学文化機関 (ユネスコ) 総会にて「ユネスコが賛助するアジア太平洋地域における無形文化遺産のための国際協力センターの設置承認」を受け、翌年8月に締結された日本政府とユネスコ間の協定に基づき、平成23年堺市に開所したユネスコカテゴリー2センター (ユネスコと協力してプログラムを実行する機関) です。

IRCIでは主にユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」の方針に沿って、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に向けた調査研究に従事する研究者や研究機関を支援し、当該分野における研究の充実を使命とする国際拠点として活動しています。昨今、世界各地で様々な理由により危機に瀕している無形文化遺産が少なくなく、その対策は喫緊の課題となっています。当センターは、日本及びアジア太平洋地域の大学、研究機関、博物館、NGO等と協力しつつ、無形文化遺産の保護に関する実践及び方法について調査研究を推進しています。

令和4年度の活動計画

IRCIでは、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための調査研究拠点として、次のような活動を推進するとともに、国際的動向の情報収集や我が国の知見を活用した無形文化遺産保護の充実につとめています。令和4年度から5年間の中期計画では、以下の項目を活動の重点領域として定めています。

1. 無形文化遺産保護のための研究の促進
2. 持続的かつレジリエントな社会構築のための無形文化遺産保護に関する研究
3. 堺市との協力による無形文化遺産に関する普及啓発活動

上記に基づき、令和4年度は次のような活動を実施します。

●無形文化遺産保護のための研究の促進

1. アジア太平洋地域の無形文化遺産に関する研究情報の持続的収集

IRCIではアジア太平洋地域の様々な国の無形文化遺産に関する研究情報の収集を、各国の研究者・研究機関と協力して行っており、IRCI研究データベースを通じてオンライン公開しています (<https://www.irci.jp/ichdb/>)。令和4年度からは、中央アジアや太平洋諸国、東ティモールやモルディブなどの小島嶼開発途上国(SIDS)に焦点をあて、現地機関との協力体制を構築して情報収集を行います。事業を通じて各国の研究動向が把握され、新たな課題の開拓など、無形文化遺産保護のための研究の促進につながる事が期待されます。

2. 無形文化遺産保護のための研究拠点形成

令和4～8年度にかけて、アジア太平洋地域の無形文化遺産研究者や研究機関のコンソーシアムを組織し、オンラインセミナー、研究者フォーラム、シンポジウム、国際会議などを企画・運営することにより、域内を中心とした研究の促進および研究者ネットワークの強化を目指しています。オンラインを活用して研究者だけでなく継承者、博物館スタッフ、政府関係者等にも幅広く活動への参加を呼びかけ、無形文化遺産保護への積極的な貢献を促します。令和4年度はその最初の企画として、オンラインセミナーを立ち上げる計画です。

●持続的かつレジリエントな社会構築のための無形文化遺産保護に関する研究

1. 無形文化遺産の持続可能な開発への貢献に関する調査研究—持続可能なまちづくりと無形文化遺産

IRCIでは、令和2年～3年度にかけて、無形文化遺産がSDGsの目標4 (質の高い教育) 及び目標11 (住み続けられるまちづくり) に果たす役割に関して調査を実施しました。令和4年度からは、世界遺産を含む文化的景観や歴史的景観の維持・マネジメントに無形文化遺産がどのような役割を果たしているかに注目して調査を行うとともに、有形・無形を統合した文化遺産保護の在り方について議論を深めます。



遊牧民の伝統的住居コルトを活用した地域博物館
(キルギス ©Taalim-Forum)

2. 無形文化遺産と災害リスクマネジメントについての調査研究

アジア太平洋の国々は、地震、津波、サイクロン、洪水、火山噴火などの自然災害により、しばしば大きな被害を受けています。本事業では、平成28～30年度にかけて実施した調査研究の成果を踏まえ、無形文化遺産の災害リスクと防災に有効な側面について把握し、最終的には、無形文化遺産およびその保護を取り入れたコミュニティの防災についての活動計画を提案することを目指しています。今年度は、昨年度に日本を含むアジア太平洋8か国で実施した卓上調査結果を踏まえたワークショップを開催し、また、無形文化遺産と防災分野の協働による現地調査を行う予定です。

3. 新型コロナ感染症の無形文化遺産への影響についての調査研究

現在も世界中で感染拡大し続けている新型コロナ感染症は、様々な形で無形文化遺産に影響を与えています。その一方で、人と人の接触を制限するコロナ禍で無形文化遺産を実践・継承するための新たな取り組みも報告されています。IRCIでは昨年度、9か国の現地機関・研究者の協力を得て現状についての質問票調査を実施しました。今年度はその成果をもとに、現地調査を通じて無形文化遺産の現状についてより詳しい調査を実施します。無形文化遺産の保護、継承、実践に新型コロナ感染症が与える影響について調査するとともに、無形文化遺産および関連コミュニティがもつ柔軟性や適応性についても明らかにします。

●堺市との協力による無形文化遺産に関する普及啓発活動

IRCIは、堺市と連携しながら、日本国内での無形文化遺産に関する普及啓発活動や情報発信を行っています。IRCIが所在する堺市博物館内において活動紹介のためのパネル展示を常設しているのに加え、堺市が主催する無形文化遺産の理解を深めるための一般市民向けのイベントへの協力などを行っています。

●情報発信

無形文化遺産保護に関する最新の調査研究プロジェクトについて多彩な写真とともにわかりやすく紹介した日英語版の概要を製作し、ユネスコ本部、ユネスコ地域事務所、カテゴリ2センター、各国ユネスコ国内委員会や研究機関、大学等に配布しています。また、IRCIウェブサイト (<https://www.irci.jp/>) はスマートフォンやタブレットにも対応し、事業内容や成果、無形文化遺産についての情報を公開し、活動情報を適宜更新しています。さらに、令和3年度には以下の刊行物を出版し、ウェブサイトでもPDF版を公開しています。

1. IRCI概要2021 (日本語版・英語版)
2. アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関するIRCI研究者フォーラム「無形文化遺産研究の進展と課題—持続可能な未来に向けて—」プロシーディングス (英語のみ)
3. 「アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための持続的研究情報収集」事業報告書 (英語のみ)
4. 「無形文化遺産のSDGsへの貢献—教育とまちづくり」事業報告書 (英語のみ)



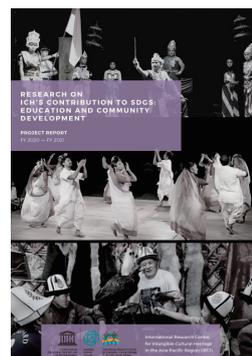
IRCI概要2021



アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関するIRCI研究者フォーラム「無形文化遺産研究の進展と課題—持続可能な未来に向けて—」プロシーディングス (英語)



「アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための持続的研究情報収集」2019-2021年度事業報告書 (英語)



「無形文化遺産のSDGsへの貢献—教育とまちづくり」事業報告書 (英語)

沿革

平成21年(2009)10月	センター設立がユネスコ総会で承認
平成22年(2010)8月	日本政府とユネスコ間でのセンター設立に関する協定締結
平成23年(2011)3月	堺市と国立文化財機構間でのセンター開設に関する協定締結
平成23年(2011)4月	アジア太平洋無形文化遺産研究センター設置準備室設置
平成23年(2011)10月	アジア太平洋無形文化遺産研究センター開所
平成30年(2018)12月	日本政府とユネスコ間でのセンター継続に関する協定締結
平成31年(2019)3月	堺市と国立文化財機構間でのセンター設置に関する協定締結

施設概要

	(m ²)	
建物	建築面積	244.67
	延面積	244.67
総室数		4室

※建物は大阪府堺市から提供されています。

文化財活用センター



文化財活用センター長
旭 充

文化財活用センター〈ぶんかつ〉は、平成30（2018）年7月に設置され、あらゆる地域で子どもから大人まですべての人々が日本の文化財に親しみ、身近に感じることができるよう、文化財の活用に関する新たな方法や機会を開発し、情報基盤の整備を目指して取り組んでいます。

■文化財に親しむためのコンテンツ開発とモデル事業推進

文化財活用センターは、文化財を通じた豊かな体験を多くの人にお楽しみいただくため、企業や各種団体と連携して、先端的な技術による文化財の複製品やVR、8K映像などのデジタルコンテンツを制作しているほか、文化財鑑賞のための教育プログラムの開発を行っています。文化財活用センターが制作した複製品やコンテンツは、全国の博物館・美術館での体験型展示、小中高等学校での鑑賞教育などに活用されています。

■国立博物館の収蔵品の貸与促進

文化財活用センターが輸送費等を支出し、4つの国立博物館が各地域ゆかりの収蔵品を全国の博物館・美術館に貸し出す「国立博物館収蔵品貸与促進事業」を実施しています。令和3年度までに23施設（16都府県）で本事業による展覧会が開催されており、今後も多くの人々に地元の博物館・美術館で国立博物館が所蔵する貴重な文化財の魅力に触れていただく機会の拡充に努めます。

■文化財のデジタル資源化の推進と情報発信

4つの国立博物館及び奈良文化財研究所の所蔵品を横断的に検索できる「国立文化財機構所蔵品データベースColBase(<https://colbase.nich.go.jp>)」、所蔵品のうち国宝・重要文化財の高精細画像を多言語（日本語、英語、中国語、韓国語）による解説とともに提供する「e国宝(<https://emuseum.nich.go.jp>)」の運営を行っています。文化財にかかるデジタル資源の活用を目指すミュージアムからの相談も受け付けています。

■文化財の保存環境に係る相談対応、技術支援等

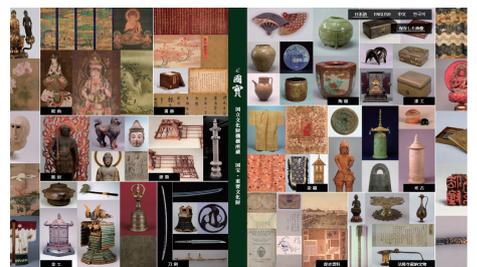
博物館等における文化財の展示・収蔵環境に関する相談を受け付け、助言や改善に必要な調査協力・技術支援を行っています。全国の博物館等で資料保存に携わる学芸員や文化財行政担当者などを対象とした、文化財を適切な環境で展示・収蔵していくために必要な知識の習得及び技術の向上に資する実践的な研修会や講習会を開催しています。

■文化財をめぐるファンドレイジング

文化財活用センターは、文化財を1000年先、2000年先への未来へ守り伝えていく取組をわかりやすく伝え、その取組に共感し、支援して下さる人々の輪を広げていくことを目的に、ウェブサイト・SNSなどを通じた情報発信、来館者に参加いただけるアクティビティの実施、「国立文化財機構寄附ポータルサイト」(<https://support-us.nich.go.jp>)の運営など、個人や企業・団体からのご支援を募る活動を行っています。



複製品を活用した鑑賞プログラム



e国宝



東京国立博物館とのファンドレイジング事業

文化財防災センター



文化財防災センター長
高妻 洋成

文化財防災センターは、頻発する各種災害から多様な分野の文化財をまもるため、令和2年（2020）10月1日に設立されました。

奈良文化財研究所の施設内に事業拠点を置き、国立文化財機構の2つの文化財研究所と4つの国立博物館の職員によって構成される文化財防災プロジェクトチームとともに、機構全体として事業に取り組んでいく体制としています。

文化財防災センターは、文化財が災害にあわないようにするための減災、被災した文化財をできるだけ迅速に救援するための体制づくりと技術開発、そして災害時の文化財の救援活動に対する支援という3つの使命を掲げ、様々な事業に取り組んでいます。

■事業の5つの柱

●地域防災体制の構築

地方公共団体、博物館、美術館、大学等研究機関、地域史料ネット等の文化財等関係団体の連携及び協力を深め、地域の文化財の防災体制を構築していきます。

- (1)地方公共団体、博物館、美術館、大学等研究機関、地域史料ネット等の文化財等関係団体との協議、情報交換会の開催
- (2)地域文化財の防災体制に関する調査研究
- (3)災害発生時における文化財等救援活動の支援

●災害時ガイドライン等の整備

災害発生時において多様な文化財の迅速な救援活動を実現するために必要となる各種のガイドライン等の策定を行います。

- (1)各分野の文化財防災に関する課題の整理
- (2)各分野の文化財の災害時における救援活動に必要なガイドライン等の検討

●レスキュー及び収蔵・展示における技術開発

平常時における文化財の収蔵及び展示における技術開発並びに災害時における文化財のレスキューに関する技術開発を行います。

- (1)文化財の災害に対するリスクの所在及び対処に関する調査研究
- (2)保存科学等に基づく被災文化財等の劣化診断、安定化処置及び修理、保存環境、被災現場の作業環境等に関する調査研究

●文化財防災を促進するための普及啓発

文化財防災に関する指導、助言、研修等の啓発及び普及活動を行うとともに、文化財防災センターでの取組等を広く国内外へ情報発信します。

- (1)シンポジウム、講演会、研究集会、地方公共団体担当者等への研修会開催による地域の防災体制構築のための人材育成等を実施
- (2)文化財防災に関する取組についての情報を国内外へ発信

●文化財防災に関する情報の収集と活用

文化財防災に関する情報の収集を進め、我が国の文化財防災システムを機能的に運用するための情報の活用方法を検討していきます。

- (1)文化財が被災した災害事例及び文化財防災の先進事例に関する情報の収集・整理・共有化
- (2)多様な文化財の防災に資するデータベース構築のためのデータ収集及び文化財防災への活用方法の調査研究
- (3)歴史災害痕跡に関するデータ収集を行い、データベース等の運用及び活用を推進
- (4)諸外国の防災の取組や被災文化財の保全処置方法に関する新たな知見の入手、諸外国の文化財防災への貢献
- (5)文化財防災に係る課題等の把握のために、文化遺産防災ネットワーク推進会議及び文化遺産の防災に関する有識者会議を開催



建築関係団体との「災害時における歴史的建造物の被災確認調査および技術支援等に関する協力協定」調印式



博物館・美術館の展示空間を再現した振動台実験（於：防災科学技術研究所 兵庫耐震工学研究センター）



水損紙資料の応急処置ワークショップ

IV 資料

役員（令和4年4月1日現在）

理事長（九州国立博物館）	島谷弘幸	監事	稲垣正人
理事	永山裕二	監事	久留島のりこ
理事（東京文化財研究所長）	齋藤孝正		
理事	林田スマ		

運営委員会（令和4年4月1日現在）

国立文化財機構の運営について各界から御意見を伺うべく、外部有識者による運営委員会を設置しています。運営委員会は、機構の管理運営に関する重要事項等について理事長に助言することを任務としています。

委員は20名以内で、任期2年（再任可）。

青柳俊彦	九州旅客鉄道株式会社代表取締役会長執行役員	田辺征夫	公益財団法人元興寺文化財研究所所長
池坊尊好	華道家元池坊次期家元	檀ふみ	俳優
伊藤嘉章	愛知県陶磁美術館総長・町田市立博物館館長	西高辻信良	太宰府天満宮最高顧問
上原眞人	公益財団法人辰馬考古資料館館長	西村泰彦	宮内庁長官
梅本和義	独立行政法人国際交流基金理事長	藤井譲治	京都大学名誉教授
逢坂恵理子	独立行政法人国立美術館理事長	古瀬奈津子	お茶の水女子大学名誉教授
木下直之	静岡県立美術館館長	銚井修一	京都大学名誉教授
佐藤禎一	元ユネスコ代表部特命全権大使	和田浩一	観光庁長官

（敬称略）

外部評価委員会（令和4年4月1日現在）

国立文化財機構では、機構の業務、調査・研究の実績について、自己点検評価を行うとともに、このことを検証し、適正な評価を行うために、外部有識者による外部評価委員会を設置しています。

委員は任期2年（再任可）。

大久保純一	国立歴史民俗博物館教授	出川哲朗	大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長・
小笠原直	監査法人アヴァンティア法人代表CEO 代表社員・公認会計士		大阪大学招聘教授・大阪市博物館機構学芸顧問
栗本康司	秋田県立大学木材高度加工研究所教授	寺崎保広	奈良大学名誉教授
児島薫	実践女子大学文学部美学美術史学科教授	寺田吉孝	国立民族学博物館名誉教授
小松大秀	公益財団法人永青文庫館長	名虎耶明	元公益財団法人五島美術館副館長・筆の里工房副館長
榊原悟	岡崎市美術博物館特任館長	浜田弘明	桜美林大学教授
坂本弘子	朝日新聞社常勤監査役	藤井恵介	東京大学名誉教授

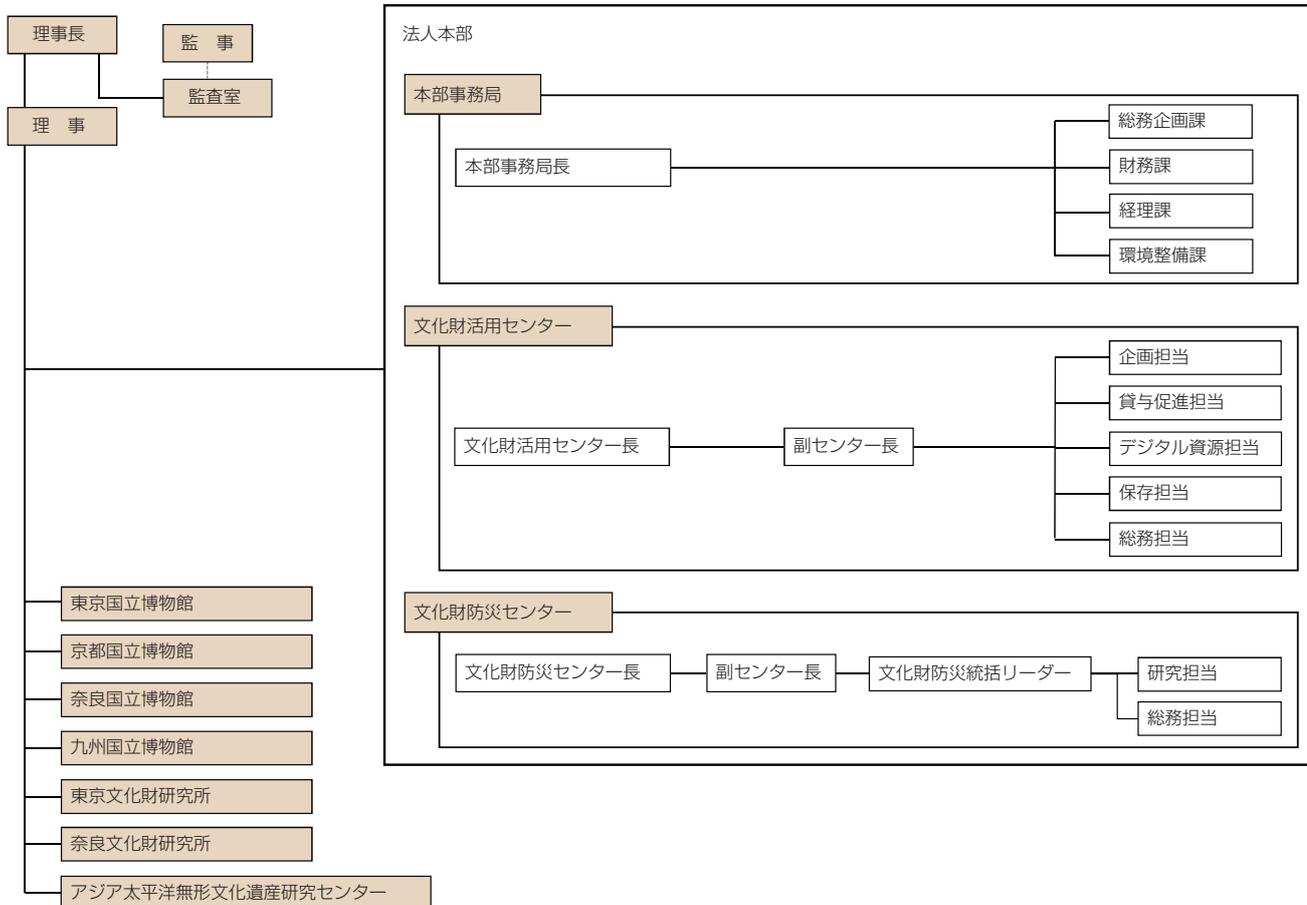
（敬称略）

職員数

区分	職員	一般職	技能・労務職	専門職	研究職
計	398	151	20	18	209
本部事務局	26	26	0	0	0
文化財活用センター	22	6	0	5	11
文化財防災センター	8	1	0	0	7
東京国立博物館	111	38	12	9	52
京都国立博物館	44	19	5	1	19
奈良国立博物館	33	15	3	1	14
九州国立博物館	26	9	0	0	17
東京文化財研究所	41	8	0	1	32
奈良文化財研究所	83	26	0	1	56
アジア太平洋無形文化遺産研究センター	4	3	0	0	1

（令和4年4月1日現在）

組織図



(令和4年4月1日現在)

予算

令和4年度予算

収入予算額

(単位：千円)

	令和4年度	令和3年度
自己収入	1,328,911	1,032,072
運営費交付金	8,918,489	9,051,943
受託収入	796,784	796,129
施設整備費補助金	0	0
その他寄附金等	787,530	798,736
合計	11,831,714	11,678,880

支出予算額

(単位：千円)

	令和4年度	令和3年度
運営事業費	10,247,400	10,084,015
人件費	3,871,865	3,809,000
物件費	6,375,535	6,275,015
受託事業費	796,784	796,129
施設整備費	0	0
その他寄附金等	787,530	798,736
合計	11,831,714	11,678,880

外部資金受入（令和4年4月1日現在）

施設	科学研究費				受託研究費（3年度）		研究助成金（3年度）	
	①科学研究費補助金（4年度）		②学術研究助成基金助成金（4年度）					
	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）
本部事務局	0	0	0	0	3	160,737	0	0
東京国立博物館	8	20,080	28	18,590	3	26,861	3	2,366
京都国立博物館	4	23,270	6	1,560	1	71,101	1	750
奈良国立博物館	1	4,420	4	1,690	1	11,366	5	1,964
九州国立博物館	5	23,530	7	8,125	5	24,176	1	700
東京文化財研究所	18	54,723	24	22,750	8	101,224	5	2,530
奈良文化財研究所	21	108,670	47	47,190	40	247,384	11	1,676
アジア太平洋無形文化遺産研究センター	0	0	1	0	2	37,092	0	0
計	57	234,693	117	99,905	63	679,942	26	9,986

※①の金額は、当初の交付決定額の4年度分の金額です。

※②の金額は、複数年度の事業の場合、当初の交付決定時に各年度分の交付額が示されます。

※金額には間接経費を含みます。

※受託研究費は機構内の委託を除きます。

国立文化財機構からのお知らせ

○寄附・寄贈

【寄附】

独立行政法人は国から運営費交付金や施設整備費補助金を得て事業運営していますが、厳しい財政状況や効率化を図る観点から、広く外部資金を導入し経営に役立てることが求められています。国立文化財機構も例外ではなく、入場料以外にも収入の道を確保しなければなりません。このような趣旨から、個人・団体を問わず広く皆様に御支援をお願いしています。

国立文化財機構は、税法上の優遇措置の対象となる「特定公益増進法人」となっており、機構へ寄附を行う個人・団体は、当該寄附金について一般の法人に対する寄附金とは異なる所得税・法人税の優遇措置を受けることができます。

【寄贈】

国立文化財機構では、文化財を保存・管理、調査研究、展示などでの公開に活用しています。これらの事業を行うため文化財を計画的に購入するほか、文化財を所有される方からの御寄贈もいただいています。

御寄附・御寄贈に関する相談や手続きについては、以下にお問い合わせください。

施設名	寄附	寄贈	お問合せ先
東京国立博物館	総務部経理課	学芸研究部列品管理課	03-3822-1111（代表）
京都国立博物館	総務課財務係	学芸部列品管理室	075-541-1151（代表）
奈良国立博物館	総務課財務係	学芸部企画室	0742-22-4454（寄附・直通） 0742-22-7774（寄贈・直通）
九州国立博物館	総務課財務係	文化財課資料登録室	092-918-2807（代表）
東京文化財研究所	研究支援推進部管理課企画渉外係		03-3823-2249（直通）
奈良文化財研究所	研究支援推進部総務課		0742-30-3916（直通）
アジア太平洋無形文化遺産研究センター	総務担当		072-275-8050（直通）

国立博物館および文化財研究所の寄附・会員制度をまとめて紹介する「国立文化財機構寄附ポータルサイト」を開設しました。

○会員制度

広く御支援を頂き運営基盤を確保するため、東京国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館では賛助会員制度を設けているほか、京都国立博物館では一般社団法人清風会による支援をいただいています。

また、来館者により博物館に親しんでいただくために、東京・京都・奈良・九州の4国立博物館ではそれぞれ様々な会員制度を設けています。

国立文化財機構発足10周年を記念して、4館共通の国立博物館メンバーズパス制度を設けています。

【国立博物館メンバーズパス】

		東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
年会費	一般	2,500円(税込)			
	学生	1,200円(税込)			
特典	平常展	東京：総合文化展、京都：名品ギャラリー、奈良：名品展、九州：文化交流展 ・会員証の御提示により、何回でも無料で御観覧いただけます(御本人様のみ)。			
	その他	京都・奈良・九州国立博物館の特別展を、団体料金で何回でも御観覧いただけます(ただし、団体割引設定がある場合のみ)。 ・各館券売所にて、会員証の御提示により、団体料金で観覧券を御購入いただけます(御本人様分のみ)。 ・学生の方は大学生(団体料金)の観覧券を御購入いただけます(御本人様分のみ)。			
お申込み・お問合せ先		総務課 渉外開発担当 03-3822-1111(代表)	総務課 事業推進係 075-541-1151(代表)	総務課 事業推進係 0742-22-4450(直通)	総務課 092-918-2807(代表)



【キャンパスメンバーズ】

各国立博物館では、大学や専修学校等を対象としたキャンパスメンバーズ制度を設けています。本制度は大学等と博物館との連携を深め、学生の皆さんにより博物館に親しんでいただく機会を提供することを目的としています。

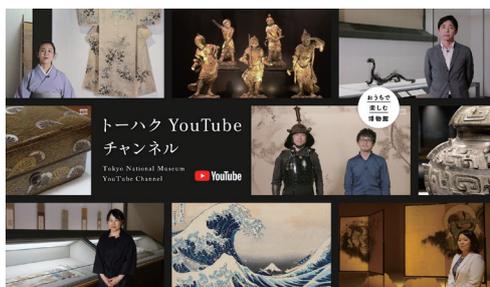
学生数に応じた年会費をお支払いいただくことにより、平常展(総合文化展、名品ギャラリー、名品展、文化交流展)を無料で御観覧いただけるなど各博物館で様々な特典を御用意しています。

○国立文化財機構の新たな取組

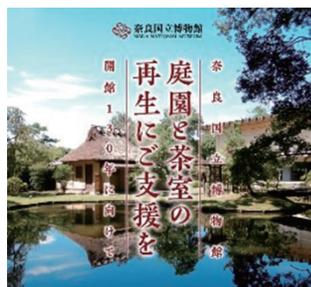
国立文化財機構では、国内外の皆様が親しまれる博物館を目指し、展示解説、キャプション・音声ガイド等について英語・中国語・韓国語での情報発信を推進し、日本の伝統文化や日本美術になじみの薄い方にも分かりやすい解説を目指しています。

また、コロナ禍において「新しい生活様式」に対応した観覧環境の整備やデジタル技術を用いたコンテンツ開発、オンラインを活用した教育活動、広報活動の充実に取り組んでいます。

文化財機構の業務の安定的な継続と業務の質の向上に必要な資金の充実のために、会員制度の充実やファンドレイジング事業の推進、ユニークベニューに代表される保有財産の有効活用、競争的資金の獲得などの多様な財源の確保に努めています。



公式YouTubeでの動画配信(東京国立博物館)



クラウドファンディング挑戦中
11月27日 9:00
12月26日 23:00
第一目標金額
1,500万円



茶室八窓庵及び庭園改修にかかるクラウドファンディング(奈良国立博物館)



新音声ガイド「ナビレンスdeきゅーはく」(九州国立博物館)



JR 上野駅公園口、鶯谷駅下車 徒歩10分

東京メトロ 銀座線・日比谷線上野駅、
千代田線根津駅下車 徒歩15分

京成電鉄 京成上野駅下車 徒歩15分



独立行政法人
国立文化財機構

〒110-8712 東京都台東区上野公園13番9号

電話:03-3822-1196 <https://www.nich.go.jp>